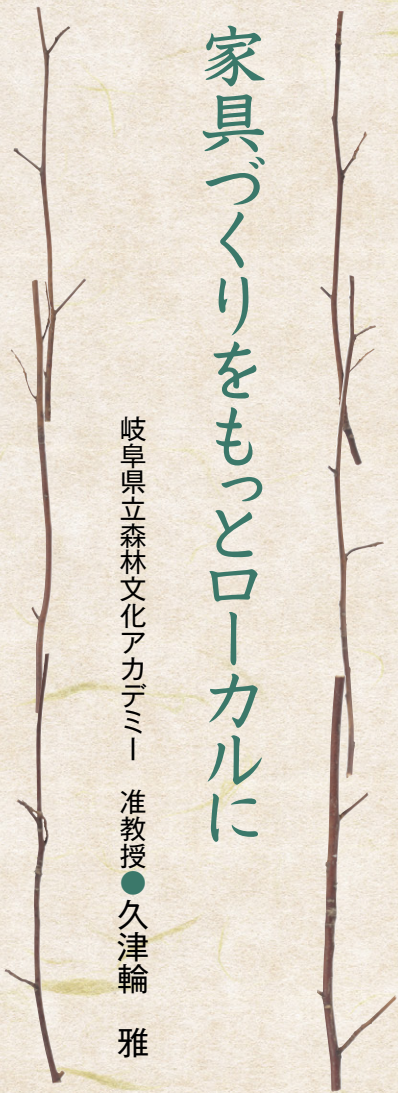


# 家具づくりをもっとローカルに

岐阜県立森林文化アカデミー 准教授 ● 久津輪 雅



「これも国産材家具!？」

コクヨファニチャー株式会社で国産材・間伐材家具の企画・提案に携わってこられた加賀谷廣代さんを森林文化アカデミーにお迎えして、オフィス家具業界の最新状況をスライドショーで見せていただいたときの反応です。美しくデザインされた都会のオフィス家具が次々と映しだされ、学生たちはスギやヒノキを使った家具のイメージを新たにしようとした。量産家具といえば、外材の広葉樹の無垢材か、合板・フラッシュなどで作られたものが大半だという印象が強いのですが、いまやオフィス家具業界では大手メーカーが国産材・間伐材を使用した製品開発・シェア拡大にしのぎを削っているのです。

プレゼンテーションでは、コクヨが90年代後半からCSRとしての国産材利用からビジネスへの移行を牽引してきたこと、イトーキが多彩な商品展開で国産材ビジネストップに踊り出て、

SYNOA(シンカ)という名の国産材モデルオフィスを東京の真ん中にオープンしていること、岡村製作所が鹿児島県の県産材コンペから約100種類・1000アイテムにのぼる商品を生み出しブランドイメージを強化していることなど、地方においては見えにくい業界のリアルな最新情報を報告していただきました。

国産材・間伐材の利用はオフィス家具のみならず、一般家庭向けの家具にも広がっています。加賀谷さんの報告でも、岐阜県の飛騨産業がスギの圧縮加工技術で多様な家具シリーズを展開していることや(同社の圧縮スギの椅子SARAGIは2014年度のグッドデザイン金賞を受賞しました)、愛知県のカリモクがバルブ用材となってきた広葉樹小径木の利用を進めていることなどが紹介されました。また、岡山県西粟倉村にある「木工房ようび」が地元産ヒノキの家具づくりで名を知られるようになるなど、各地の小さな

事業体による取り組みも始まっています。「国産材」からさらに「地域材」へ、作り手も使い手も意識が進みつつあるということですが。

森林文化アカデミー・ものづくり講座では、このような社会の動きも意識しながら、昨年度より小さな試みを行って行っています。地域の材料で学習机を作る実習です。第1回目は、アカデミーの隣にある美濃保育園にご協力いただき、1人1人の学生がこれから小学校にあがる子供を持つご家庭1軒ずつを担当しました。制作にあたり、子供をどこで勉強させたいか、どんな機能が必要か、好みの材質や色はあるかなど、細かく聞き取り調査を行い、デザインに反映させていったのです。3月にはそれぞれの家庭ごとにユニークな学習机ができあがり、保育園で発表会を行いました。

この試みで分かったことがあります。それは、ユーザーが求めているのは単

なる「家具」ではなく「子供を学ばせる環境」であること。その際に必要なのはカタログやネットの情報だけでなく、相談できる相手(作り手)であること。また、そのような作り手との対話を通して、地域のスギやヒノキ、あるいは小径の広葉樹などが魅力ある材料として選ばれることです。

こう考えると、家具、中でも学習机やダイニングテーブルなど人生の節目に求められる家具づくりは、もっとローカルに行われていいのではないかと思います。小さな木工所が各地にあり、親御さんやお子さんたちと対話しながら、時には作業に参加してもらいながら、地域の山の材料で学習机が作られるようになればどんなに素敵でしょうか。森林文化アカデミーの小さな試みはまだ始まったばかりですが、大きな夢を描きながら進めていきたいと思っています。



アカデミーの学生が作ったオリジナル学習机